

歸莊の落花詩

藤井, 良雄

<https://doi.org/10.15017/2332673>

出版情報 : 文學研究. 79, pp.153-176, 1982-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

歸莊の落花詩

藤井良雄

一

中国の近代史は一八四〇年の鴉片戦争によって開幕するとされるが、その翌年道光二十一年（一八四一）に、動乱の中国の行末を案じながら没した詩人龔自珍（一七九二—一八四二）の「己亥（道光十九年・一八三九）雜詩」中に、落紅すなわち落花を詠じた次の詩がある。

浩蕩離愁白日斜 浩蕩たる離愁 白日斜めなり

吟鞭東指即天涯 吟鞭 東を指して天涯に即かん

落紅不是無情物 落紅は是れ無情の物ならず

化作春泥更護花 化して春泥となり更に花を護る

（己亥雜詩其二）

この詩の結句「化して春泥となり更に花を護る」という表現に関して、『龔自珍己亥雜詩注』等の書⁽¹⁾を閲しても、その由来や典故を指摘する記述は、管見の及ぶところ見つからなかつた。しかし、論者は出典とは言わぬまでも、それ

と似かよった表現を、歸莊（一六一三—一七三三）の「落花詩」中に見出した。

狂風發發振芳林 狂風發發として芳林を振るひ

揺落傷殘自不禁 揺落傷殘して自ら禁ぜず

亂舞終非入井態 亂舞も終に井に入るの態に非ず

翔空如見墜樓心 空を翔けるも樓より墜つる心を見るがごとし

山頭雲雨一時散 山頭の雲雨一時に散じ

天上金鈿何處尋 天上の金鈿 何處に尋ねん

化作春泥亦已矣 化して春泥となるも亦た已みなん

不堪墮在馬蹄涔 墮ちて馬蹄の涔に在るに堪へず

ここに指摘するごとく、歸莊の「落花詩」其七に、龔自珍が「己亥雜詩」中に詠じた「化して春泥となる」落花の例がすでに存在する。

ところで、龔自珍は歸莊の「落花詩」を眼にすることがあったであろうか。歸莊の詩集は「恆軒詩集」十二卷、文集には「懸弓集」三十卷・「恆軒文集」十二卷があったが、ほとんどすべて散佚したようである。⁽²⁾その後、道光年間になって、太倉の季錫疇（字範卿、号菘耘、一七九一—一八六二）が、その遺文を集め文六卷・詩一卷として「玄恭文鈔」と名付け刊行した。⁽³⁾ただし、「落花詩」は単独に伝写されていたようである。中華書局版『歸莊集』に収載する「落花詩」には、歸莊の序と他の文人の評語まで附せられているからである。清末道光年間ともなると、乾隆時代の榮華を誇った清朝もその凋落傾向は覆い隠しがたく、各地で反乱が頻発していた。年々の阿片輸入の増大とその代価の銀流出の激化により「銀貴錢賤」現象が急速に悪化し、人民の生活に破綻を来たす。清朝を支える軍隊の保持とともに、権力維持の重要な柱すなわち国家財政を危機に追い込んだ。こうした時代情況の道光年間の経世家たちは、先

例として時代の危機に生を享けた明末清初の「經世致用之學」に解決の糸口を見つけようとした。かくして道光年間以降、顧炎武（一六一三—一八二）や黄宗羲（一六一〇—一七五）をはじめとして、明末清初の經世之學を支えた文学者の発掘および再評価の現象が顕著となる。江蘇呉県の黄汝成（字庸玉、一七九一—一八三七）が『日知錄集釋』を、山西平定県の張穆（名瀛運、字石州、一八〇五—一四九）が「顧亭林先生年譜」を作成したり、曾國藩（字濂生、一八一—一七二）によって王夫之（号薑齋、一六一九—一七二）の全集『王船山遺書』二八八卷が刊行される等、その例といえよう。⁽⁴⁾ おそらくは、上述した季錫疇の『玄恭文鈔』の刊行も、その時代の要請であったのであろう。また、龔自珍にも、明末清初の遺民屈大均（字翁山、一六三〇—一八九）の禁書とされていたはずの『番禺集』を読んだ感想を記す「夜、番禺集を讀む、其の尾に書す」詩を作り、遺民の生涯を遂げた屈大均をかゝる屈原になぞらえる程の強い共感を示している。屈大均と顧炎武とは抗清の遺民同志としての連繋があり、また顧炎武とは「奇歸顧怪」と目され、「同年同学同郷」であった歸莊も遺民であった。それ故、龔自珍が歸莊の残した詩文を意志的に読む可能性は非常に高いといえよう。顧炎武・歸莊・屈大均の文集が発禁書であったにしてもである。

さて、龔自珍は「己亥雜詩」の中で落花を詠じ、その「落紅」に春泥と化した落花としてよく次代に開く花を育成せんとする彼の落魄意識を表現したが、すでに明末清初において歸莊が「落花詩」の中で、後述するように呉偉業（号梅村、一六〇九—一七二）や宋琬（字荔裳、一六一四—一七三）ら一流の文人から絶讃を受けるほどの表現をなしたのであった。本論文は、明代において、落花の詠として歸莊の「落花詩」が現われるまでの過程を検討し、歸莊の「落花詩」について、先行する明代の落花詩とは異なるところの、いかなる時代性が刻印されているのかを明らかにするの
がねらいである。

幸田露伴はその『幽情記』の「一枝花」と題する文章に於いて、公安派の袁中郎（二五六八—一六一〇）について、次のごとく述べている。「此の人風流韵雅の好厚かりしかば、瓶史一篇を著はして、瓶中に花を貯へ、案頭に春を賞するの趣致を記せり。これより後、張氏謙徳の瓶花譜、李氏笠翁の間情偶寄等、瓶花の事を説くものありと雖、中郎の書最先に居る。而して其の持論、高尚にして煩瑣ならず、絶えて匠俗の氣無く、欣賞すべきなり。おもふに文雅の士、誰か花を愛せざらむ、既に花を愛すれば、之を瓶中に挿むの事も、また自らにして存するの數なり。然るに古よりして瓶花の事を説くものある無く、中郎に至つて始めて書有る、これ奇とすべきを覺ゆ。」これによれば、袁中郎の「瓶史」が出て以後、瓶花の書が輩出したという。中国の詩人であつて古來、花を詠ずることや花への愛好は露伴の言を待つまでもなく文人の趣味として当然のことであつた。周敦頤の「愛蓮説」には、「水陸艸木の花、愛すべき者甚だ蕃おほし。晉の陶淵明は獨り菊を愛す。李唐より來このかた、世人甚だ牡丹を愛す。豫獨り蓮を愛す云云。」といふごとく、時代やその人の趣味から、色々の花を愛玩してきたのである。六朝時代では、芙蓉、唐は牡丹、宋は梅がとりわけ愛玩されたようであるが、以後、花の種類も多様化し、明清時代になると、このような愛花の風潮が極点に達したのである。その情況は、この時代に盛行した「小品」文学の絶好の材料として花が用いられたことによつても理解できる。また、陶望齡（一五六二—一六〇九）「養蘭説」、鍾惺（一五七四—一六二四）「夏梅説」、張大復（一五五四—一六三〇）「別水仙花説」、吳從先「林逋梅論」「荷葉辯」、李流芳（一五七五—一六二九）「跋盆蘭卷」等の花論・花説や、花譜の類が数え切れぬほど出版された。⁷⁾一方、絵画の方でも、色々な花の図巻が描かれた。本論が主題とする「落花詩」も、明代第一の画家とされる沈周（一四二七—一五〇九）が描いた「落花圖卷」とそれに題した「落花詩」に端を發している。この「落花圖卷」は現在故宮博物院に蔵されている。⁸⁾縦三〇・七、横一三八・六の絹本着色の巻軸で、引首

題字には「紅澗綠長」と記し後幅に沈周が落花詩十首を自書している。その落花詩は「石田先生集」所収の落花三十首の第一、二、三、四、六、七、八、九、十、二十一首で、少し文字に異同がある。さらに沈周の弟子文徵明（一四七〇—一五五九）が和して「和答石田先生落花十首」を自書している。文徵明の落花詩は、その「甫田集」に収める「和答石田先生落花十首」とは、第一首を異にし、また収載の順序も異なり、字句に異同がある。

沈周は呉派の巨匠であり、彼の弟子であった文徵明・祝允明（一四六〇—一五二六）・唐寅（一四七〇—一五二三）・徐禎卿（一四七九—一五一二）の四人は「呉中四才子」と称せられるように、蘇州画壇・呉派文人画を興隆させただけでなく、芸苑の中心としての蘇州を再びよみがえらせたのである。蘇州は、元時代豊かな経済力を基盤に繁栄し、とりわけ張士誠（一二三二—一三六七）がこの地を拠点とした至正十六年（一三五六）以降は、江南文化の中心として多くの芸術家が集まっていた。しかし、元末蘇州は最後まで朱元璋に抵抗したので、明朝統一の後、蘇州は明朝に最後まで反抗した都市として苛酷な政治的圧迫を被った。太祖朱元璋の文人嫌いと粛清の犠牲となった文人は、元末四大家の一人王蒙（一二三〇—一八八五）をはじめ、高啓（一二三六—一三七四）・楊基・張羽（一二三〇—一三八五）・徐賁の呉中四傑など多数にのぼり、隆盛を誇った蘇州は、明初洪武年間（一二六八—一三六八）に、その文化の後継者を失い、以後沈黙の時期を迎えていた。それが、沈周が蘇州に登場した後、彼の周辺には多くの人物が集まった。画家としては史忠、書家としては李應禎（一二四三—一九二一）・呉寛（一二四三—一五〇四）・祝允明、賞鑑家として名高い朱存理（一二四四—一五二三）・都穆（一二四九—一五二五）などがいた。そして沈周の下から文徵明や唐寅が輩出した。以後、蘇州を中心とする呉派が芸術界をリードすることになる。絵画では呉派文人画を継ぎ、書では世に「世下の法書、みな呉中に歸す」と称せられるほど、蘇州は文芸の中心として隆盛を極める。袁中郎の次の文章がその状況をよく伝えてくれる。

蘇郡の文物は一時に甲たり。弘（弘治年間一四八八—一五〇五）正（正徳年間一五〇六—一二）の間に至り、才藝代出し、斌斌として極盛と稱し、詞林は天下の五に當る。厥の後、昌穀（徐禎卿）少しく呉の敵を變じ、元美（王世貞

一五二六―九〇）兄弟繼いで作り、高く自ら標譽し、務めて大警壯語を爲す。吳中綺靡の習、之に因りて一變す。而して剽竊は風を成し、萬口響を一にして、詩道浸く弱へ、今に至るまで、市賈の傭兒も、争ひて諷吟を爲し、遞ひに相ひ臨摹す。人の一語の格を出で、或いは句法の事實會つて見し所に非ざる者有るを見れば、則ち極めて之を詆り、野路の詩と爲す。其の實、一字も觀ざること雙眼漆せしが如く、眼前幾んど爛熟せる故實に則り、雷同翻復せるは、殊に厭穢すべし。故に余往きて吳に在るに、濟南の一派（古文辭派）は其の呵斥を極む。而して賞識する所は、皆吳中前輩の詩篇にして、後生の甚しくは推重せざる者なり。高季迪（高啓一三三六―七四）而上は論なし。功名を事とするを以てして詩文の清警なる者有り。姚少師（姚広孝一三三五―一四一八）・徐武功（徐有貞一四〇七―七二）是れなり。鑄辭と命意と、言はんと欲する所に隨ふも、寧ろ弱くして縛なき者は、吳文定（吳寛一四三五―一五〇四）・王文恪（王鏊一四五〇―一五二四）是れなり。氣高く才逸れ、羈絆に就かず、詩曠らかにして文なる者は、洞庭の蔡羽（一五一四―二）是れなり。王・李（王世貞・李攀龍）の擯斥する所とならずして、而も識見議論卓れて觀るべき有り、一時の文人之を望んで、其の崖際を見ざる者は、武進の唐荆川（唐順之一五〇七―一六〇）是れなり。文詞甚しくは奥古ならずと雖も、然も自ら戸牖を闢き、亦た能く言はんと欲する所を言ふ者は、崑山の歸震川（歸有光一五〇五―一七二）是れなり。半ばは時に趨き、半ばは古を學び、立意造詞、時として己の見を出す者は、黃五岳（黃省曾一四九〇―一五四〇）・皇甫百泉（皇甫汭一四九七―一五八二）是れなり。畫苑と書法と、一時に精絶し、詩文の長、之に因りて掩はれし者は、沈石田（周）・唐伯虎（寅）・祝希哲（允明）・文徵仲（徵明）是れなり。其の他名を知らずして詩文の觀るべき者は甚だ多し。大抵、慶（隆慶年間一五六七―七二）・曆（萬曆年間一五七三―一六一九）以前は、吳中の詩を作りし者、人各々詩を爲る。人各々詩を爲る、故に其の病靡弱に止まるも其の爲に傳ふべきを害はず。慶曆以後、吳中の詩を作る者、共に一詩を爲る。共に一詩を爲れば、此れ詩家の奴僕なり。其の傳ふべきや否やは、吾得て知らざるなり。間ま一二の稍や自ら振拔せる者有り。

彼の中の人士を見る毎に、皆之を媚り笑ふ。幼にして小生に學び、先輩を貶駁すること尤も甚だし。厥の由る所を揆るに、徐（禎卿）王（世貞）二公、實に之が俑を爲す。然れども二公は才も亦た高く、學も亦た博し。昌穀をして中道に天せず、元美をして于鱗（李攀龍）の毒に中らざらしめば、就る所當に此に止まらざるべし。今の詩を爲る者、才は既に綿薄、學もまた孤陋、時論の毒に中ること、復た彼よりも深し。詩安くんぞ愈よ卑からざるを得んや。……余は因て詩道の昔時の盛んにして而今の衰へたるを感じ、且つ時の詩の流毒の深きを歎するなり。

（筱姜陸二公同適稿）

さて、以上述べたような蘇州出身の文人が書家でも画家でもあったように、歸莊も蘇州府に属する崑山出身の書家画家でもあった。歸莊は蘇州文芸の伝統の中で成長した。歸莊の實際の書画の師は、おそらく彼の父歸昌世（一五七三—一六四五）であつたと思われる。歸莊は「筆耕説」と願する文章において、

吾が家、先太僕（歸震川）は文を賣り、先處士（歸昌世）は書畫を賣りてより、筆耕を以て自ら給して世を累ぬ。

亂に遭ひて家破れ、先處士に背られ、余は飢窘困蹙し、瀕死すること數しばなり。比年來、余の文章書畫の名稍く著はれ、頗る來り求むる者有り、頼りて以て饘粥を給す。

と述べているごとく、父が書画を売って生計を立てており、歸莊は父に書画を習つたのである。また、歸莊の文学の師としては、父昌世の友人であつた錢謙益を挙げられるが、錢氏の方でも歸莊の並々ならぬ詩や書画の才を愛し、これを養守したことは、拙論「歸莊の文學思想—錢謙益からの師承について—」¹¹に於いて少しふれた。また錢謙益は袁宏道の弟袁中道（一五七〇—一六二三）とも親しき友であり、錢氏が編集した『列朝詩集』において公安派の「性靈説」を大いに顕彰し、一方では公安三袁と同じく、一世紀にわたる「古文辭」を、空しい模倣として排撃するような、詩文には自由な心情の、自由な表現をむねとした自由人タイプの個性的文人であつた。さらに、明代の「落花詩」流行の端をなした沈周の文学を最も強く推奨したのが錢謙益であつた。

沈周の死後、弟子の文徵明が「石田先生行狀」を草し、友人の王鏊が墓誌銘を作ったが、百数十年後の錢謙益も「石田先生事略」を作り、沈周の詩文集を重編刊行し、その「事略」を付録とした。それ故、錢謙益は沈周の作品の蒐集に務めており、歸莊も錢氏の絳雲樓で、沈周の書画及び詩を看たにちがひなく、その師からも沈石田の詩を推奨されたのであろう。

三

沈周の「落花圖卷」は上述したように、一幅が故宮博物院に現存する。そして沈周の「落花詩」に和したのは、この図卷の文徵明だけではない。弘治十八年（一五〇五）晩春に、沈周の「落花詩」に文徵明・唐寅・徐禎卿・呂憲の四人がこぞって和韻した。中でも唐寅は連作としても最多数の三十首も作っている。その最後第三十首目に、

花朵憑風着意吹

花朵風に憑せて意を着けて吹かれ

春光棄我如竟遺

春光我を棄てて竟に遺すが如し

五更飛夢環巫峽

五更の飛夢 巫峽を環り

九畹招魂費楚詞

九畹の招魂 楚詞を費す

衰老形骸無昔日

衰老の形骸 昔日なきも

凋零草木有榮時

凋零の草木 榮く時有り

和詩三十愁千萬

和詩三十 愁千萬

此意東君知不知

此の意東君知るや知らずや

と詠じ、唐寅も連作に苦勞したことがうかがわれる。「和石田先生落花詩」という同一の題で三十首も一時に作るの

は、いかなる詩人でもその詩想を枯渇させ、その詩はことばの遊戯に墮するのではあるまいか。

さらに、唐時升「和沈石田先生詠落花」・楊穀「落花次石田翁韻」・羅燾「追和石田翁落花詩」など、それ以後沈周の詩に和したものでなくても、かなりの数になる。また連鎖的に文徵明の詩に和韻した朱承爵「落花詩次文徵仲韻」まで見られるように、明代盛期の太平の世にあって、「古今落花を詠する者は、動もすれば巻軸に盈ち、亦た態を盡くし研を極む。」(孫永祚「歸莊落花詩跋」といわれるほどに、文人たちの流行となっていた。

さて、歸莊の「落花詩」について論評する前に、歸莊以前の明代の落花詩の実態について検討を加えておく。沈周が「落花詩三十首を詠み得」たのは、彼の晩年七十八歳のときである(一五〇四)。その為か以下に見るごとく、沈周の落花詩のモチーフは、落花を詠うことによって老残回顧の感傷を叙するものが主であった。

芳菲死日は生時 芳菲 死日は是れ生時

李妹桃娘盡欲見 李妹も桃娘も盡く見んと欲す

人散酒闌春亦去 人散じ酒闌き 春も亦た去る

紅消綠長物無私 紅消え綠長じ 物に私無し

青山可惜文章喪 青山惜しむべし 文章喪ぶを

黄土何堪錦繡施 黄土何ぞ堪へん 錦繡施くを

空記少年簪舞處 空しく記す 少年 簪舞の處

飄零今已鬢如絲 飄零 今已に 鬢は絲の如し

(落花其八)

この詩の尾聯に端的に詠われるごとく、若かりし青春の回顧と衰老の身の感懐である。とりわけ、彼の老残の思いを「落花」に託したといえる。そして、次に挙げるごとく、老いの身を詠い込むことが沈周の落花詩の特徴である。

大家準備明年酒 明年の酒

慚愧重看是老人 慚愧す 重ねて看るは是れ老人なるを

(落花其二十二)

莫怪留連三十咏 怪しむなかれ 留連三十咏

老夫所傷少人知 老夫傷むところ 人の知ること少し

(落花其二十九)

これら沈周の詩に限らず、「落花詩」において歌われる内容は、個人的感懐を主体とする文人趣味的なものが多い。書家としても画家としても一家を成していた彼らは、まさしく「文人」であった。これらの文人たちは、その多くが芸術のみに生き、哲学とも政治とも無縁であった。吉川幸次郎によれば、「その生活は、文学を至上とし、芸術を至上として生きる態度である。芸術を至上とするゆえに、その生活も、芸術家としての特権を主張し、常識にこだわらない。こうした態度の人物を、この時期以後の語で、『文人』と呼ぶ。従来の中国の文明が必ずしももった人物ではない。……文学あるいは芸術のみに専心し、政治とは無縁であることが、積極的に要求される人物である。したがって官僚でなく、純粹な市民であることが、要求される。また芸術家である資格として、その生活には、多かれ少なかれ何ほどかの奇矯さ、つまり常識からの逸脱が、要求される。」という。この指摘は、明代成化・弘治年間以降の文人たちに関して、とりわけ当を得ている。沈周は八十三年にわたる長い生涯を、母への孝養を理由にして「抗隱」の生活に執着し続け、一度も仕宦することはなく一貫して詩と書画を以て民間に隠れ住んだ市民であった。また、二十歳で沈周の下へ画業の弟子入りした文徵明にしても、弘治十一年（一四九八）二十九歳のときから、南京での郷試に応じ続けるが、以後嘉靖元年（一五二二）まで十試みな及第せず、官僚エリートにならなかつた。彼は五十四歳のとき、歳貢をもって薦挙され、北京に赴き翰林待詔を授けられるが、都での生活は長くは続かず、たびたび上疏して南

帰を乞い、四年後には蘇州に帰った。以後は二度と仕官することなく、沈周以後、呉派の指導者として、また師にとらず九十歳の天寿を享受した。文徵明は沈周を継いで呉派の巨匠となり、画業はともかく書においてはその師よりまさるともいわれる。おそらく詩作においてもより洗煉さを加えたらしく、彼の落花詩はまさしく妖艶である。

零落佳人意暗傷 零落の佳人 意暗傷

爲誰憔悴減容光 誰が爲に憔悴し 容光を減ずるや

將飛更舞迎風面 將に飛ばんとして更に舞ふ風を迎ふ面

已褪猶嬌洗雨妝 已に褪せたるも猶ほ嬌なり雨に洗はる妝

芳草一年空路陌 芳草一年 路陌に空し

綠陰明日自池塘 綠陰明日 池塘よりす

名園酒散春何處 名園酒散じ 春何處ならん

惟有歸來屣齒香 惟だ歸り來たる屣齒の香有るのみ

(和答石田先生落花其二)

この詩、『甫田集』では第二首目で、沈周の「落花圖卷」に合巻としたときは第四首目として挙げている。文徵明の落花詩では、「佳人」「悵人」「美人」「明妃」を詠い込むこと十首のうち四首にも及び、落花と相俟つていよいよ妖婉、詩人の歳四十年足らずの壮年の麗筆といえよう。

桃蹊李徑綠成叢 桃蹊李徑 綠叢を成し

春事飄零付落紅 春事飄零 落紅に付す

不恨佳人難再得 恨みず佳人の再び得がたきを

緣知色相本來空 緣りて知る 色相の本來空なるを

舞筵意態飛飛燕

舞筵の意態は飛飛たる燕

禪榻情懷裊裊風

禪榻の情懷は裊裊たる風

蝶使蜂媒都懶慢

蝶使蜂媒すべて懶慢たり

一番無味夕陽中

一番の無味 夕陽の中

(和答石田先生落花其六)

これら落花詩に詠われる「佳人」「美人」がどのような女性性であるのか、いまだ分明ではないが、其九では、

江風飄泊明妃淚

江風飄泊す 明妃の涙

綠葉差池杜牧情

綠葉差池たり 杜牧の情

と歌っているので、杜牧が「秦淮に泊¹³」して一緒に紅灯緑酒の歡を尽くしたような妓女「佳人」であろうか。また蘇州は美人の多かつたことも有名で、「すくなくとも妓女といえは、蘇州の女と意識されていた¹⁴」ほどである。彼ら吳中の風流才子は、落花ともに美人を詠いこむことが多い。「落花詩」ではないが、文徵明のそのような美人を詠った「暮春」と題する詩を挙げておく。

高榆風定翠相圍

高榆 風定まりて翠相圍む^{みどり}

天氣悠揚思轉微

天氣悠揚 思ひ轉た微かなり

畫閣凝香新試扇

畫閣 香を凝らし 新たに扇を試み

春肌生汗欲更衣

春肌 汗を生じて 衣を更へんと欲す

乍聞幽鳥渾無見

乍ち幽鳥を聞くも渾べて見ゆるなく

時墮游糸忽漫飛

時に游糸墮ちて忽ち漫ろに飛ぶ

惆悵東闌尋曉夢

惆悵す 東闌に曉の夢を尋むるも

落花芳草已都非　落花と芳草と已にすべて非なり

ところで、沈周・文徵明ともに生涯ほとんど蘇州に暮らし、天寿を全うした。沈周は父沈恒（一四〇九―七七）の代から糧長を務める程の豪農、地主階級の出身である。文徵明も祖先に文天祥がおり、明朝以後代々官僚を出し続けた家柄で、父の文林（一四四五―九九）は南京太僕侍丞を経て、温州府の知府になっている。沈周・文徵明二人共に蘇州府長洲県出身であり、この大都会で「文人」としての生活が困難なく維持できたのである。呉派の巨匠としての彼らの売文売画の生業は余裕のあるものであった。彼ら二人に比べると、唐寅は肉屋の息子の出身であり、『警世通言』巻二十六「唐解元一笑姻縁」に描かれるような奇行の主で、さらに文人的奇矯さを持ち極めて个性的で、画が売れて金が入ればすぐ豪遊に使い果すほどの奔放な性格であった。因みにいえば、呉中四才子の残る一人、書にすぐれた祝允明は、飲む、うつ、買うの三拍子揃った男であったといわれる。⁽¹⁶⁾

唐寅もまた蘇州人であるが、沈周・文徵明の長洲県に対し呉県出身である。「乾隆吳縣志」⁽¹⁷⁾によれば、「長・元（清代蘇州長洲県と元和県すなわち明代長洲県）の富者は數世に亘りて絶えず。而るに吳邑（呉県）の富者は或いは易世にして貧しく、或いは身に及んで盡き、昨は百萬と稱するも、今は遂に立錐に地なき者あるは、蓋し長久の計を知らざるによるなり。」と両県民性の差異を述べている。呉県出身の唐寅は、沈周・文徵明とは対照的で「商売でせっせと稼いだ親の財産を、数年でみごと飲みつぶした遊蕩の芸術家、あっぱれ呉県民の代表者」⁽¹⁸⁾であった。唐寅の父親唐廣徳は閩門に近く商人や文人の集まる繁華街呉趨里で肉屋をしていた商人であり、息子の寅に立身出世の夢を託した。唐寅も聡明で、十六歳で蘇州府学の生員となり、二十九歳弘治十一年（一四九八）の南京での郷試は、解元すなわち首席合格をする。しかし、唐寅は翌年、北京での会試の際、不幸にも試験問題漏洩事件に巻き込まれて処罰投獄され、官途の望みを全く失うという急転直下墜落の体験を嘗め、故郷蘇州に帰って来た。内山知也氏によれば、「弘治十二年己未（一四九九）は唐寅の運命を決定した最悪の年であった。三十歳の彼は喜びの絶頂から絶望屈辱の深淵へと突き

落されてしまったのである。……唐寅はこの衝撃から無常感を身に着けたのであった」といわれる。彼に残されたものは芸術の生涯であり、以後画業に潜心するが、遊蕩児である唐寅は、祝允明と同様に、すでに文人画家としての売文売画の生活を余儀なくされていた。本章の開頭に挙げたごとく、唐寅三十九歳の「落花詩」の基調は、「蘇州の晩春の哀愁溢れる風情と無情感である」⁽¹⁹⁾のはもつともなことだと思われる。

以上、歸莊以前の落花詩をみておくため呉派の詩を取り挙げた。それは、当の歸莊が明代の落花詩について、呉派以来の人々の名を挙げ、批評を加えているからである。のみならず、歸莊の落花詩を読んだ宋琬（號荔裳、一六一四—一六七三）も次のごとく述べている。

此より前に落花を賦せし者、唐子畏（唐寅）を以て最たりと爲す。然れども佳句多しと雖も、而るに之を織縛に失し、數篇以後、大抵略ぼ同じ。玄恭（歸莊）磊落崎嶇の才を以て、婀娜旖旎の詞を爲し、興會の至る所、猶ほ英雄の本色を帯ぶ。此れは其の確かに傳ふべき所以なり。

落花詩の最高とみなされた唐寅にしても、「佳句多しと雖も、而るに之を織縛に失し、數篇以後、大抵略ぼ同じ。」とする宋琬の評は厳正であって、一時に三十首も和韻した唐寅の落花詩は、彼自ら「和詩三十愁千萬」と漏らしたごとく、「大抵略同」と評されて仕方のないものであった。それに反して、歸莊の「落花詩」十六首（十二首又四首）には、「その確かに傳ふべき所以」がある。

四

歸莊は、自作の「落花詩」に序を付して次のごとく述べている。

落花の詠、昔は二宋（宋郊・宋祁）を稱す。成・弘（成化・弘治時代一四六五—一五〇五）の際、沈石田先生に落花詩

三十首有り。同時の呂太常、文待詔、徐迪功、唐解元、皆和する作有りて、率ね十を以て計ふ。其の後は申相國（申時行一五三五一六一四）、林山人の輩、唱和動もすれば數十篇あり。亦た已に態を窮め致を極め、美を競ひ奇を争ひて、後に作者有るも、殆んど手を措き難し。然るに諸公皆盛時に生れ、風雅を推激し、休明を鼓吹し、落花に復た衰殘の景ありと雖も、題詠には多く穢麗の辭を作せり。即ひ感歎有るも、風塵の沉、憔悴の色に過ぎざるのみ。我辰ならざるに生れ、故多きに遭値ひ、客するは荆土に非ざるも、常に動もすれば華實蔽野の思ひあり。身は江南に在りて、仍ほ大樹飄零の感有り。以て風木痛絶し、華萼悲しみ深きに至り、階下の芝蘭、亦た遺種なし。一片初めて飛び、時有りて涙を濺ぐ。干林掃くが如く傷懷するに限りなし。是を以て風情を摹寫し、容態を刻畫するに、前人極に詣り、嗣響難しと爲す。情感の寄する所に至りては、亦た諸公の有する所に非ず。歩みを學ぶに心なく、敢へて齊驅と曰はん。景を借りて情を抒べ、情盡きれば則ち止む。十二章を得て、用つて同志に貽る。

この序を読めば歸莊が明代の先輩の落花詩の作者たちを、どのように評価していたか判明する。その前にまず、この序に言及される人物について少しく説明を加えるならば、二宋とは大宋と称せられた宋郊と小宋と呼ばれた宋祁（九八—一〇六一）で北宋の文人。彼らの落花詩に関する品評は、吳喬『圍爐詩話』や褚學稼『堅瓠集』²⁰に載る。それから沈周の落花詩に呂憲、文徵明、徐禎卿、唐寅が和韻したことは、前章ですでに検討したとおりである。申相國は申時行のことで、官僚としても成功し張居正の知遇をうけて入閣し、張居正の亡き後、位「相國」宰相に至った人物で、やはり長洲吳出身である。林山人は現在のところ不明である。以上のごとく、歸莊は落花詩の作者として吳中出身の人物、とりわけ書画においても代表的な沈周以下吳派の文人たちを挙げている。歸莊も書画では吳派の巨匠たちに学んだにちがいがなく、彼らの落花詩も読んだのである。しかしながら、歸莊は、「歩を學ぶに心なく、敢へて齊驅と曰はん。」と述べるほど、自分の落花詩に対して自負を示す。これは、歸莊が自己と比して、吳派の文人たちが太

平の盛時を享受し、彼らの詠じた落花詩が、「即ひ感歎有るも、風塵の況、憔悴の色に過ぎざるのみ。」と看破したからである。彼らに反して、歸莊が生涯を送ったのは、明清鼎革の明末清初という乱離の時代であり、明朝滅亡と清軍の侵略、清朝への抗戦という現実の闘争に参加し、危機の時代を生きのびて来た歸莊には、明朝崩壊を象徴させる「大樹飄零の感」は禁じえなかった。そして、「情感の寄する所に至りては、亦た諸公の有する所に非ず」というところこそ、まず歸莊自から語る、明朝の諸公の落花詩と大いに相異なる肝要の点である。歸莊がこの時詠んだ落花詩は最初わずか十二首であるけれども、それは他の作品に和韻したものではなくて、「景を借りて情を抒べ、情盡きれば則ち止」めた自己の真情から湧き上がったものであり、唐寅のごとく文人趣味として遊戯的に作ったものではない。その第一首を読むと、次のごとくである。

江南春老嘆紅稀 江南春老い 紅の稀なるを嘆く

樹底殘英高下飛 樹底の殘英 高下して飛ぶ

燕蹴鶯銜何太急 燕蹴り鶯銜む 何ぞ太だ急なる

溷多茵少竟安歸 溷多く茵少く 竟に安くに歸せん

闌干曉露芳條冷 闌干の曉露 芳條冷し

池館斜陽綠蔭肥 池館の斜陽 綠蔭肥ゆ

靜掩蓬門獨惆悵 靜かに蓬門を掩ひて獨り惆悵し

從他江草自菲菲 江草 自ら菲菲たるに從^ま他^かさん

これは、吳派文人の詩とは異なり、決して妖艷ではない。また、彼らの詩の落花には「桃花」「杏花」「梨花」等、具体的に花名を詠じ込むことが多いのに対し、歸莊の落花は一体それが何の花であるか不明であり、故意に抽象化されている。それ故、歸莊が詠む「落花」は何らかの象徴と考えられる。というのも、歸莊の落花詩に「寄託」がある

ことを、吳偉業（一六〇九—七一）が見抜き、次のごとく称讃しているからである。

流麗深雅にして、寄托の旨を得、體物の致を備へり。玄恭の詩、超詣にして前なし、駸駸呼として驪騮を度越せり。

吳偉業は歸莊の落花詩を眼にしたとき、同感の思いに打たれたに相違ない。彼と歸莊とは親しき友人であり、まさしく吳偉業は、明朝が北京で滅んだとき臣節を全うせんとして死を謀ったが果さず、明朝鼎革の後、遺民の一生を貫かんと願うも、迫られ出仕し武臣となつたわずか二年を生涯の過誤として憂悶の中で滅亡した先朝を哀しみ、帰らぬ過去に傷心しながら、おそらくは歸莊と同じ心情で詩作し死んで逝つた詩人なのである。

さて、この詩の「寄託」を考究すれば、第一句中の「紅の稀なるを嘆く」は、抗清の遺民志士の残り少なくなつたことを象徴するのであらう。頷聯の「燕蹴り鶯銜むこと何ぞ太だ急なる 溷多く茵少く竟に安くにか歸せん」とは、同志たちが困難に遭つて行く当てもないことを詠うのである。端的に言えば、遺民を逐げることの困難さであらう。

第七句の「獨り惆悵す」は、吳派の詩人たちが「玉人惆悵」と多く「佳人」女性の惆悵を詠うのとは異なる、同志的な失意の嘆きであらう。以上推測して述べたことは、後統の詩を読めば検証できると思う。其三を読む。

融和天氣轉淒涼 天の氣に融和して 轉た淒涼

冉冉紛紛舞欲狂 冉冉紛紛として 舞ひて狂はんと欲す

難向幕中依燕壘 幕中において燕壘に依り難く

慣來橋畔買魚梁 橋畔に來りて魚梁を買くるに慣れたり

水紅疑出茱萸汙 水紅くして茱萸の汙に出づるかと疑ひ

月白空臨薜荔牆 月白くして空しく薜荔の牆に臨む

醉罷賞筵猶未遠 醉ひて賞筵に罷かるも 猶ほ未だ遠ざけず

到今還把送行觴 今に到るまで還た送行の觴を把る

この詩は、おそらく同志との別離を歌う。一方、表現の面からいえば、序の中で「客非荆（楚）土、常動華實蔽野之思」と述べていたように、歸莊の落花詩においては、「冉冉」「菲菲」「薜荔」等のごとく、「楚辭」を出典にする詩語が顕著である。次に挙げる其五の詩では、それがより明確である。

枝上黄鶯漸露身 枝上の黄鶯漸く身を露し

飛英歷亂墮紅塵 飛英歷亂して 紅塵に墮つ

將隨薜荔依山鬼 將に薜荔に隨ひて 山鬼に依らんとするも

難共靡蕪待美人 靡蕪を共にして美人を待ち難し

河北名園貪結子 河北の名園 結子を貪り

武陵歸棹欲迷津 武陵の歸棹 津に迷はんとす

香車寶馬緣都盡 香車寶馬 緣りて都て盡き

天賜幽人一錦茵 天は幽人に賜ふ 一錦茵

この詩のみならず、「楚辭」による詩語を象眼のごとく嵌め込んでいる。

名園那便容蕭瑟 名園那んぞ蕭瑟を容るるに便ならんや

剪綵無如此日宜 剪綵此の日の宜しきに如くは無し

（落花詩其二）

帶雨墮階苔濺淚 雨を帯びて階に墮ち 苔に涙を濺ぐ

隨風貼水荇招魂 風に隨ひて水に貼き 荇に招魂す

（落花詩其四）

最恨東皇收拾盡 最も恨む東皇 收拾し盡くし
不留一樹綴山溪 一樹も山溪に綴るを留めざるを

(落花詩其六)

以上の歸莊の詩には「楚辭」に典故を有する詩語を鏤めることにより屈原の君を懐い国を憂えた心情への連想が繋がり、これら歸莊の落花詩の基調は、「楚辭」のトーンをその背景としたものであって、まさに詩人の憂憤の情の表現であろう。そして、歸莊の憂国の思ひは、序の「一片初めて飛び、時有りて涙を濺ぐ。千林掃くが如く、傷懷するに限りなし。」ということばから、うかがわれるように、後半の詩において、さらに高い調子で詠い上げられる。其八を挙げる。

萬樹穠華無復存 萬樹の穠華 復た存することなく

飄零失所不須論 飄零して所を失ふは 論を須たず

空中何處求遺種 空中何處にか 遺種を求めん

散後無緣更庇根 散りて後 更に根を庇ふに縁なし

珮玦臨江愁帝子 珮玦江に臨み 帝子を愁ひ

珊瑚滿路泣王孫 珊瑚路に滿ち 王孫を泣く

騷人羈客關情切 騷人羈客 關情切なり

觸目凄然有淚痕 觸目凄然 淚痕有り

詩中に、「帝子を愁ひ」「王孫を泣く」と歌っているのは、おそらくは、明滅亡以後の現実の情況を詠じたものである。一六四四年甲申の変、崇禎帝は景山で縊死し、明朝は滅亡する。その翌年、一六四五年乙酉の変によって、南進した清朝軍によって、南京に擁立されていた福王は殺害されるが、同年唐王が福州に即位し、魯王が紹興で監国の位

に即き、翌四十六年には錢謙益門下であった瞿式耜らが桂王を広西省肇慶に擁立した。しかし、同年、唐王は早くも滅ぼされ、魯王も舟山列島に逃走した。更に、一六五〇年に清軍は、桂林を陥落させ、桂王は南亭へ翌年には広南へと敗走する。一六五三年には、魯王も遂に監国の位を去る。その間、歸莊も、顧炎武・萬年少の要請に応じて淮陰へ出かけて教師となり、彼らと連繫をとりながら、反清活動の地下工作に従事していた。しかし、その計画も、まもなく萬年少が病死（一六五六）、顧炎武も江南に居住できなくなつて、北遊の旅（一六五七年初）に登り、彼らの計画も実ることとはなかつた。一方、桂王は雲南にまで敗走を続けていた。そうした時代の進行が落花詩の連作中に反映している。

喬林芳氣已全銷 喬林の芳氣 已に全く銷へ

棣萼微榮亦自飄 棣萼の微榮も 亦た自ら飄る

瓣墮遺書和淚拂 瓣は遺書に堕ちて 涙の拂ふに和し

影來長枕作魂招 影は長枕に來りて 魂招を作す

荒荒白日看歸土 荒荒たる白日 看すみす土に歸り

習習東風不返條 習習たる東風 條に返らず

剩下蔚蒿元賤質 蔚蒿を剩し下すも元もと賤質

空勞夢裏候花朝 空しく夢裏に勞して 花の朝を候つ

一六五九年になると、桂王は、緬甸領内へ逃走する。この年、明の殘臣の鄭成功、張煌言が崇明島を占領し、爪州に勝つて、南京を攻略するが大敗し、海上から廈門へ逃れ、遂に鄭成功は台湾に入る。すでに、明の殘党も風前の灯となつていた。そして、一六六一年緬甸に清兵が入り、桂王が吳三桂によって年頭には殺害されたとの報が江南にも伝えられる。同年、鄭成功も台湾に没した。

山舍村莊花事闌 山舍村莊 花事闌つき

元來宮禁早凋殘 元來宮禁 早くも凋殘す

御溝流出香全散 御溝より流出して 香 全く散じ

上苑飄來影更寒 上苑より飄來して 影 更に寒し

物候定知憑氣轉 物候定めて知らん 氣に憑りて轉ずるを

人情且復與時安 人情且く復し 時とともに安し

明年青帝乘權日 明年青帝 權に乗るの日

萬紫千紅返舊觀 萬紫千紅 舊觀に返さん

これは、連作十二首の最後の詩である。尾聯に「明年青帝權に乗る日あらば、萬紫千紅舊觀に返さん」と詠うが、「青帝」とは春を司どる神であり、言外に明朝または漢民族の皇帝を指すのであろう。「舊觀に返さん」とは、大自らの循環の中では可能であるが、この人の世すなわち清朝治下では、明再興はすでに不可能であることを示唆する。かくして、歸莊の落花詩は、滅びし明の盛華と、その余香（遺民）の消滅に対する挽歌・鎮魂歌であった。

五

以上要するに、歸莊の落花詩は、落花によって明の盛華の凋落と余香の消滅とを象徴させているといえるのではない。先行する吳中文人の落花が、明朝極盛期に多く詠われたものであるのに比べて、歸莊の明滅亡後の落花の表現の意義は、特筆すべきものである。またすでに、それは同時代の文人たちから、稱讃を受けていた。しかしながら、この落花詩は、清朝治下にあつては、決して公刊できるようなことはなく、遺民の精神を継承した心ある文人たちに伝写され、後世に伝わったのであろう。

最後に、歸莊の落花詩の制作年代は何時頃であろうか。落花詩には、吳偉業と宋琬の評語が付せられている。吳偉業が早く一六七一年に没しているので、制作年はそれより以前である。敢えて推測を述べれば、吳三桂による桂王殺害による明滅亡（一六六一）前後と考えてもよい。大概、一六六〇年代中に作られたのである。六一年としても、歸莊はすでに四十九歳、もう知非の年である。この頃の彼の生計は書画を売ることによって立てられていた。また彼は自ら、「余は花に於いて愛せざる無し。」（尋菊記）、「余素より花を愛す。」（看牡丹記）と記すごとく、花は書画の題材としてのみならず、晩年の文人として生きる精神的な糧となっていた。そして、一六六〇年代は、江南の各地の名園や山岳へ「看花」放浪の旅へ出かけ、『尋花日記』上下巻⁽²⁾を残している。歸莊が多くの文字を費し丹念に付けた看花の日記には、自己を「花を逐ふ狂客」（看牡丹記）と自認しながらも、一方花に関する風流逸事については、「布衣の士を以て、生亂離に當り、是くの如きを求め欲すれども、殆ど得べからず。」（尋菊記）と記すことを忘れなかった。明清鼎革という極限の時代を、生身でかいくぐり生存してきた歸莊にとって、彼自身「看牡丹詩」にのみじくも「亂離時逐繁華事 貧賤人看富貴花」と詠んだごとく、花はそれを描くことによって生計の糧になるが、彼にとって文人趣味的な逃避の場所とはならなかったのである。明代盛期、吳派文人たちの落花詩とは異なり、民族の危機を体験した心ある文人すべてに、歸莊の落花詩は共感を呼び起す。ならば、龔自珍「己亥雜詩」にみる「落紅」の「春泥」が、歸莊の落花を踏まえるものと推察しても、それは決して当てはずれだとはいえないであろう。

註

(1) 田中謙二訳注『龔自珍』（岩波書店 一九六五）。萬尊疑注『龔自珍己亥雜詩注』（香港中華書局 一九七八）。劉逸生注『龔自珍己亥雜詩注』（中華書局 一九八〇）。

(2) 同治元年（一八六二）版、重修『蘇州府志』による。

(3) 『歸莊集』上・下冊(新華書店上海發行所 一九六二)の冒頭に付す中華書局上海編輯所の「出版説明」と巻末に付す崑山の趙尊三編輯「帰玄恭先生年譜」に拠る。

(4) その他にも、「当に亭林顧氏の書を読み、心を經世の学に留む」(湖南通志卷一七九、国朝人物)と伝えられる馬敬之や「馮桂芳、字林一、学亭林を宗とす」(呉県志卷六六)と伝えられる馮桂芳(一八〇七—一七七二)等、このような人物は多い。

(5) 龔自珍三十歳(道光元年一八二一)の作「夜読番禺集、書其尾」

其一 其二

靈均出高陽

奇士不可殺

万古両苗裔

殺之成天神

鬱鬱文詞宗

奇文不可説

芳声聞上帝

読之傷天民

(6) 『露伴全集』第六卷一二四頁。

(7) 昭和五十三年度文部省科学研究費総合研究A「明末における思想運動の総合的研究」研究発表(一九七八年十一月十九日)において、「花と美人の文学—明末清初を中心として—」と題し発表された合山究氏に拠れば、「花の百科全書(花譜の総集)」として三十六種の書名が指摘されている。

(8) 入矢義高・中田勇次郎編『文人画粹編四—沈周・文徵明』所収。

(9) 袁中郎全集「敝姜陸二公同適稿」(有不為齋本)。

(10) 清の徐沁の『明画録』巻第七「墨竹」には、「帰昌世字は文休、崑山人、震川先生の孫にして、邑の諸生なり。詩書に工にして、草法に精し。晚(年)に和陶詩を作りて尤も佳なり。墨竹を写して蕭疎縦逸、別に風格を具ふ。」と記載している。

(11) 九州大学文学部「文学研究」第七十八輯所収。

(12) 吉川幸次郎著『元明詩概説』(中国詩人選集二集2) 一〇四頁。

(13) 杜牧(八〇三—一五二)の「泊秦淮」

煙籠寒水月籠沙

煙は寒水を籠め 月は沙を籠む

夜泊秦淮近酒家

夜秦淮に泊して酒家に近し

商女不知亡国恨

商女は知らず 亡国の恨み

歸莊の落花詩(藤井)

隔江猶唱後庭花 江を隔てて猶ほ唱ふ後庭花

(14) 岩城秀夫訳『板橋雜記・蘇州面筋録』(倉東洋文庫29) 二三八頁。

(15) 糧長とは、明代、鄉村において税物の徵集と輸送を行わせるため、一定区域ごとに配置された政府の徵税代理人で、人望の高い地主階級が無報酬で担当する。官僚ではない。

(16) 前掲書(13) 二三五頁。

(17) 乾隆十年(一七四五)版『吳県志』。

(18) 内山知也「唐寅の生涯と蘇州文壇」(筑波大学「文芸言語研究」三)。

(19) 前掲論文(18)。又、岩城秀夫「唐伯虎伝」(世界ノンフィクション全集27)も参考。

(20) 吳喬(字修齡、崑山人)『塵壚詩話』卷五。褚学稼(字人穫、長洲人)『堅瓠七集』卷三「二宋落花詩」。

(21) 『尋花日記』には、「洞庭山看梅花記」・「看牡丹記」・「尋菊記」・「看寒花記」・「觀梅日記」を収載する。

(22) 帰荘の「看牡丹詩」は散佚しているが、この聯は、錢謙益の「婦女恭看花二記」(有学集卷四九)によって伝わる。